

# むつ市と恐山イタコ観光：地域像に着目して

宮崎 友里\*

## 第1章 はじめに

### 第1節：問題の所在

1950年代後半から70年代にかけて日本社会が高度経済成長を遂げる中、重厚長大産業を中心とした高度経済成長を支える産業施設を持つ地域には雇用が生まれ、人口が増大し、経済規模は拡大した。その一方で、そうした経済成長に直接的に組み込まれた産業施設を持たない地域もあった。経済成長が主題であった当時の日本社会において、高度経済成長への貢献が困難であった地方自治体は、自治体の指針に何を見出してきたのか。

本稿では、むつ市を事例として検討する。取り上げるのは、むつ市の観光資源の活用状況である。具体的には、むつ市は集客力のあつた観光資源をむつ市内に有していたにもかかわらず、観光資源の利用は一時的なものにとどまるのみで、継続されることはなかったのである。仮に、むつ市が地域経済の拡大を目指していたならば、観光は重要な収入源であつたはずである。であるならば、むつ市が集客力のあつた観光資源を継続的に活用できなかった理由は何だったのか。

これまで、地方自治体の観光政策や観光関連事業への取り組みは、観光拡大化策とおおよそ同義で議論され、観光縮小化策やそれを取り得る状況はほとんど検討対象とされてこなかった。しかしながら、観光資源を有する地方自治体が観光資源の継続的活用を行わなかったという事実は、観光拡大化の重要性が繰り返し強調される今日においてこそ、重要

---

\* 神戸大学大学院国際協力研究科 博士後期課程

な意味を持つものとして提起できよう。

## 第2節：先行研究

地方自治体の観光政策に関しては、神奈川県自治総合研究センター編（2007）や上田（2016）といった先行研究が少なからず報告されているが、それらは観光拡大化策としての政策提言を論旨とするものや、政策実施に焦点を当てたものである。地方自治体による観光政策の形成に関する研究は、恐らくほとんど報告されていない。

この現状を前提としたうえで、地方自治体による観光政策がどのように形成されるのかという問いに答えるため、その手掛かりを観光政策以外に焦点を当てた先行研究に求めたい。

地方自治体の政策形成に関しては、多様な先行研究から知見を得ることが出来る。そこには、政策決定過程における重要な要素に関心を寄せる理論的研究や、特定の地方自治体の政策形成に関する事例研究が数多く蓄積されてきた。とりわけ、都市開発に関する先行研究からは観光政策を捉えるにあたり非常に有益な示唆を得られるであろう。なかでも、蓮見らは都市政策を重層的に観察しており、地方自治体による都市政策の全体像を捉えている（蓮見・似田貝・矢澤 1990）。

但し、こうした地方自治体の政策研究において、議論の中核は政策形成の過程とその結果である。他方で、政策の形成過程に至る前段はあくまでも前提としての位置づけにとどまり、その重要性はほとんど強調されてこな

かったのではないだろうか。

これに対し、アイデンティティの重要性を指摘する研究群において、行動の前段としての心理的動機は重要なものとして繰り返し議論に組み込まれてきた。アイデンティティを国家単位で着目した研究はナショナリズム研究として蓄積されているが、地域単位においてもその重要性は報告されている。代表的なものに、ウィッケらの研究が挙げられる。ウィッケらは、旧炭鉱都市を産業遺産化する際、当該地域のアイデンティティが重要な動機であることを明らかにした（Wicke, Berger & Golombek 2018）。

こうした視点を共有するものとして、宮崎は地方自治体の政策形成の前段として、心理的動機が重要であることを明らかにした。宮崎は、水俣市が水俣病経験を活用した観光客誘致へ舵を切った際、水俣市における水俣地域像が変化したことが重要であったことを、関係者や関係機関の発信等から明らかにした（宮崎 2019）。

## 第3節：方法

そこで本稿が着目するのは、地域像である。当時の地域住民間でどのような地域像が理想とされ、あるいはどのような地域像が否定されてきたのか。本稿は、自治体が政策決定を行う前段として地域住民の視点を重視するものである。当時のむつ市内において議論されてきた地域像をもって、むつ市の実際の動向をどの程度説明可能であるのかを検討していきたい。

地域住民による地域像は、地域住民を読者に想定した資料を用いて観察する。具体的には、地方紙や郷土資料である。またむつ市の動向を観察する資料としては、行政刊行物や市長の発言といったむつ市の組織としての発信を焦点として取り上げる。

これら資料は、現在むつ市立図書館に蔵書として残されているものを多く参照した。

#### 第4節：議論の流れ

本稿の議論の流れは以下の通りである。

まず、第2章を前史として、地域像が抱えていた問題点が解決されなかったことを確認する。具体的には、「立ち遅れた」現状の解決手段として、地域開発の必要性が議論され、むつ市が製鉄事業の誘致を行うも頓挫に至る過程である。当時の東奥日報を資料として、具体的な議論内容を確認する。

続いて第3章では、むつ市がイタコを用いた地域像の提示を取りやめた事象を、当時の地域教育関係者らを中心とする郷土史研究会の主張を用いて解釈する。具体的には、郷土史研究会は地域の「後進性からの脱却」を説き、イタコを前近代に位置付けて説明することでイタコ観光に苦言を呈したのである。

以上を通して、恐山イタコ観光は、地域像が有していた問題点の解決指針に沿わないものであったことが明らかになる。

本稿はむつ市が組織としての発信を行う前段として、地域住民間に共有された地域像が重要であったと指摘するものである。

## 第2章 むつ市の状況と指針

### 第1節：「立ち遅れた辺境の地」像

むつ市はどのように理解されていたのだろうか。むつ市をより広域的に捉える際の地域区分は下北地域と呼ばれるが、ここでは下北地域内での地域理解の状況をヒントとして、むつ市の地域理解を推察していきたい。

当時の下北地域において下北地域はどのように捉えられていたのかを理解する手掛かりとして、小学校の教諭向けの資料が参考になるだろう。下北社会科教育研究会編集による『下北の郷土資料』は、下北の社会科担当教員によって分担執筆された、小学校の中学年での郷土学習の教師用資料として想定された資料である（申賀 1967：まえがき）。

本書の序文において、下北教育事務所長であった柿崎は、下北の人々にこう問いかける。「わが郷土を、本州北端、中央文化から隔てられたさい果ての地・後進の地域とのみ思い、ひげ目を感じ、閉鎖性意識におちいつている人がいないであろうか（柿崎 1967：序）」。

続いて、本書の冒頭に「下北の地域性」という一節が掲載されている。「私たちの郷土「下北」は、本州の北端（北緯41度中心・最北端大間弁天崎41度31分）に位置し、斧状の半島で、南は上北郡と接するが、東に太平洋、北は津軽海峡をはさんで北海道と対峙し、西は津軽半島とともに平館海峡を形成し、南は陸奥湾をかかえているため四面海に囲まれ海岸線はかなり長い。・・・(中略)・・・このように位置が北に偏っていること、中央

から離れていること、陸続きがほんの一部であることから交通条件も悪かつたし、開発や文化にも遅れ、経済的にも恵まれなかったことから、「本州の袋小路」とか「孤島のへき地」等といわれてきた（工藤 1967：1）。

神崎と工藤に共通するのは、「下北は地理的理由で発展に不利であるから、社会経済的発展に立ち遅れている」という論理である。この「立ち遅れた辺境の地」という感覚が、当時の下北地域、つまりむつ市において鋭敏であったことが分かる。

## 第2節：「立ち遅れた辺境の地」からの脱却の試み

だからこそ、下北地域には開発の必要性が認識されていた。下北地域の発展、開発に関して、当時の段階で何が議論されていたかを記録したものに、『東奥日報』がある。『東奥日報』は、青森県内で講読されている地方紙である<sup>1</sup>。

1958年4月26日付の社説「下北開発と基礎調査(上)」にはこう記されている。

「こんにち産業、文化、その他あらゆる面において特殊なものをのぞいては青森県は決して日本の平均水準にあるとはいわれまい。その青森県で最もおくれているのは下北である。これはこの地域の人達にとつて極めて不幸なことなのであるが、逆にこの地域には最も将来性があるということも出来るわけである。その将来性を開き、住民の不幸を幸に転ずるカギこそ開発であることはいうまでもない。」

ここで、下北を開発することが下北住民の幸福感に寄与する、とされている。であるならば、その開発は何を基軸とする必要があると捉えられていたのか。

1958年12月22日付の社説「下北の発展に必要なこと(上)」にはこう記されている。

「日本で一番遅れているのは東北地方である。」「これまでの県政には、真に県百年の大計を樹立すべき基礎的な資料の収集もされず、これに基く企画も根本的に行われず、その日暮らしの彌縫策に終始したのであつて、今日の言葉でいうと、いわゆる県政に科学性が欠けていたのである。敗戦を契機として、われわれはあらゆる部面に頭を切替えて、祖国復興に専念するためには真に科学を重んじ、県政を根本から建直さなければならぬと信ずる。」

すなわち、青森県内において、下北の発展に必要なのは科学性であると議論されていた。

但し実際には、下北の開発が急速に展開することはなく、下北は開発の面で「置去りにされた<sup>2</sup>」という感覚を持ちながらも、こうした処遇に「地元は慣れっこ<sup>3</sup>」であったとも報じられている。

## 第3節：工場の誘致と頓挫

そうした中で、下北開発は次第に展開を見せることになった。下北開発の目玉策として資源開発への取り組みが行われたのである。東奥日報1960年9月26日付の社説「下北半島の夢と現実」には下北開発へ寄せる期待が

記録されている。

「下北開発の核心をなすものは地元資源を利用した工業誘致であろう。このためには工業立地条件の整備には格別の配慮をしなければならず、計画でも整備に二十一億円、これと同じ意義を持つ交通施設に四十四億円を投ずることになっている。」

1963年2月3日付社説のタイトルには、「緒につく下北開発」とある。

「東北開発会社が発足当時から五大基幹事業のトップとして重視してきた下北砂鉄開発事業は、いよいよ正式申請位と大蔵省にたいする説明などいっさいの事務手続きを終わり、今週中には正式認可が見込まれている。開発の遅れている本県にとって、また青森県のチベットなどとさえいわれてきた下北地方にとって、第二次産業開発の巨歩が踏み出されることは、とにかく喜びにたえない。」

ここから、下北の地で砂鉄開発事業が始まることは下北地域にとって喜ばしいものとして捉えられている様子がうかがえる。

そして1963年、いよいよ下北開発の核となる砂鉄事業を担うむつ製鉄株式会社が設立された。東奥日報1964年5月30日付の社説「最終段階を迎えたむつ製鉄」には、「下北開発の拠点としてのむつ製鉄」と繰り返し叫ばれていたことに触れられ、「いまは下北地方の一つの悲願となっていることは紛れもない事実である」と記されている。

しかし、次第にむつ製鉄事業に暗雲が垂れこみ始める。むつ製鉄事業が実施されないままに棚上げされてしまったのである。1965

年3月27日付の東奥日報「むつ鉄の早期実施を」には、社会党の川俣東北開発委員長が内閣総理大臣に提出した申し入れ書の概略を掲載されている。

「この事業に大きな期待をかけている青森県とむつ市は政府の地元協力要請にたいして困難な地方財政にもかかわらず、他の事業計画に先んじて工場敷き地の整備、工場設置に伴う港湾、道路の改修など数億円におよぶ先行投資を行ってこれにこたえている。」

むつ製鉄事業は、むつ市が発展への足掛かりとして大きく期待を寄せた開発事業であった。しかしながら、遂には断念するに至った。1965年4月にむつ製鉄の解散が決定した。

### 第3章 恐山イタコ観光と後進性への注目

#### 第1節：恐山イタコ観光ブームの発生とむつ市の対応

本節では、まずむつ市内にある恐山で活動するイタコが有名になったことを受け、来訪者が1970年前後から急増したことを背景として記述する。こうした状況変化に応じて、むつ市はイタコ観光の整備や定期刊行物でイタコを取り上げるなどしたが、むつ市によるイタコ活用の動向は1975年を最後に確認できなくなったことを確認する。

#### 第1項：恐山イタコ観光と来訪者の増加

1960年代に入って、むつ市は俄かに全国からの関心を集め始めた。むつ市管轄内の恐山で活動する在野の巫女、イタコがマスメデ



ィアから繰り返し取り上げられたのである。

現代の恐山イタコ研究を牽引する研究者に、大道晴香がいる。大道は宗教学的見地からマスメディアと恐山イタコの関係について研究している。大道によれば、マスメディアが恐山イタコへの関心を一気に強めたのは1960年代である(大道2017:90-96)。

こうしたイタコへの関心の高まりは、報道陣だけでなく、ひろく観光客の来訪をもたらした。大道による観光客数の整理によれば、観光客数は以下の通り増加している。青森県企画部(総務部)統計課編『青森県統計年鑑』に掲載された「県内主要観光地観光客数の推移」において、恐山県立公園の来訪者数の推移は1957年に年間4万人、1958年に3万7千人、1959年に3万6千人、1960年に11万8千人、1964年に20万人と記録されている。その後の来訪者数の推移はむつ市商工観光課編『商工経済要覧』の「下北半島各観光地の入込客数推移」における「恐山」項目から確認でき、1970年には23万7千人、1971年には30万人、1972年には32万7千人、1973年には36万人、1974年には37万8千人と記録されている(大道2017:219-220)。

以上から、恐山への来訪者数は1960年代から継続的に増加し、特に1970年代は急増の一途を辿っていることが確認できる。

大道は、恐山を訪れる観光客の増加の時期と、マスメディアによる恐山イタコ報道の増加の時期が重なっていることに着目し、恐山観光の特徴について以下のように考察している。

「〈恐山のイタコ／恐山＝イタコ〉という場を象徴する表象の普及が、恐山の来訪者数増加に寄与した可能性は非常に高いと言えよう。よって、従来流通してきた「マスコミの影響を受けて来訪者が増えた」という定説には、一定の妥当性が認められる。仮に両者の因果関係が実証できないにせよ、上記の年代の一致は、少なくとも一九六〇年代以降に霊場を訪れた多くの人々が〈恐山のイタコ〉という表象の受容者であったことを示すものであり、いずれにしても一九六〇年代以降の恐山とは、マスメディアが作りだした〈恐山のイタコ〉という表象受容者が大量に入りこんだ時期であったと結論付けることが出来る(大道2017:221)」。

すなわち、当時の恐山観光において非常に重要となっていた観光資源とはイタコであった。

## 第2項：観光環境の整備

イタコブームとも言うべき状況が生じて以降、イタコの活動場所として全国的に広く知られるようになった恐山だが、その恐山を市内に擁するむつ市は当時の状況をどのように捉えていたのだろうか。1962年に発行を開始した『むつ市政だより』における恐山に関連する記事を通して、当時のむつ市の恐山への理解を確認したい。なお、『むつ市政だより』は発行号によってページ数は異なるが、およそ10ページ前後の冊子である。また、発行の頻度については、創刊当初は不定期であったが、1965年1月発行の第4号から一年

間に5回発行（1月、4月、6月、8月、11月）となっており、定期的に発行されるようになっている。

『むつ市政だより』において初めて恐山に関連するものが登場するのは1964年12月発行の第3号である。『むつ市政だより』（1964年第3号）には、その表紙写真に恐山の写真が使われており、その下に「下北観光ブームをまきおこした恐山」との説明書きがある。また『むつ市政だより』（1965年第6号）には、恐山行バスの開通を知らせる記事の中に、「日本三大霊山として神秘さ素朴さが最近観光面でも高く評価され年々観光客の数も増えてきている恐山の山開きは去る五月十日関係者が集まって行われ同時にバス開通式も行われた」とある。さらには『むつ市政だより』（1965年第8号）には、河野市長の就任挨拶が掲載されており、「観光につきましては近年当地方が全国的にわかに脚光を浴び、その価値は非常に高く評価されておりますので、国立公園の指定を始め、観光開発の推進を図ることが将来市政振興のために必要なことであると考えておる次第であります」と語られている。

長年にわたり地域信仰と結びついてきた恐山であるが、『むつ市政だより』からは、むつ市は恐山へ寄せられた全国的関心を観光の文脈で理解していることが読み取れる。こうした理解に基づいて、恐山観光を積極的に整備・推進していこうというむつ市の姿勢がうかがえる。

なお、実際に、『むつ市政だより』（1965

年第6号）について上で紹介した通り、恐山に向かうバスが開通されている。この恐山線は田名部あるいは駅前を出発し、恐山を最終目的地とする路線であり、多い時期で一日に往路復路あわせて12本のバスを運行するスケジュールとなっている。また、市長が就任挨拶で宣言した通り、1967年6月には国立公園指定の候補地となり、その翌年には国立公園となっている（朝日新聞1967年7月28日夕刊6頁）。更には、イタコが恐山で口寄せの商売を行うのは、夏祭りの期間のみであったのだが、1970年頃<sup>4</sup>から「イタコの口寄せの需要が多くなったので」、「むつ市役所の観光課と地元のバス会社とのはからいで」、「観光の一環として、バス会社の経営するレストハウスで行われることになった」（高松1993：47）。

以上から、むつ市は恐山への来訪者の増加を観光の文脈でとらえており、その中心的役割にイタコを据えていたことが確認できる。

### 第3項：むつ市刊行物におけるイタコの登場

先に紹介した大道は、マスメディアによってイタコが恐山を代表するものとして扱われたことをむつ市が受容していく様子を通時的に示している（大道2017）。その際に用いられた資料は『むつ市勢要覧<sup>5</sup>』のうち1960年から1989年に発行されたものだが、ここでは大道による『むつ市勢要覧』の整理を前提にしながら、大道が取り上げなかった1990年以降発行の『むつ市勢要覧』も検討対象に

加えることで、より長期的にむつ市による恐山の記述の変化を確認していく。

『むつ市勢要覧』が初めて発行されたのは1960年だが、この時、観光の項目にて恐山が触れられているが、イタコには言及されていない。

またこの時使用されている写真も恐山の全体的な風景を写したものであるため、イタコを強調したものではない。もっとも、1960年時点でむつ市がイタコ認識していないと考えるのは困難であるが、「一九六〇年の時点で、むつ市が「恐山のイタコ」を観光資源と捉えている様子は無い（大道2017：204）」。

『むつ市勢要覧』において初めてイタコが登場するのは1963年である。『むつ市勢要覧1963』の観光の項目において、主要な行事欄に「恐山祭典とイタコの口寄」を挙げ、「毎年7月20日から24日まで開催され、イタコの口寄せが行われる。口寄せとは巫女が死者の言葉を生者の依頼で伝えることをいう（むつ市1963：113）」として、イタコに言及している。またこの時使用されている写真は、恐山に関する複数枚のうち一枚がイタコの口寄せを写したものである。

その後、1965年発行の『むつ 1965』では、「7月20日から24日までの祭典は参拝者が雲集し、イタコ（巫女）の口寄女（霊媒）に涙する人が多い」と記されている。また1968年発行の『むつ市勢要覧1967年版』には、恐山の項目にイタコの写真二枚が掲載されている。

『むつ市勢要覧1967年版』には下北半島を

舞台とした『飢餓海峡』の著者である作家、水上勉による寄稿が掲載されている<sup>6</sup>。水上勉という流行作家による寄稿を掲載したことについて、大道は1968年発行の『むつ市勢要覧1967年版』は映画『飢餓海峡』の公開を受ける形で作成されたものだと推測している。「こうした状況より浮かび上がるのは、大衆文化の動向を意識し、それを積極的に取り入れ活用していた、むつ市の観光開発に対する姿勢である（大道2017：206）」との解釈が成り立つ。

すなわち、恐山イタコの観光資源化をもたらしたマスメディアによる表象を受容する形で、むつ市は恐山を説明し始めたのである。

『むつ市勢要覧』において、むつ市は1963年から恐山の項目にイタコを用いていた。それは、1972年に一度取り上げられなくなったことを例外として除けば、1975年の『むつ市勢概要1975年度版』まで継続している。この点に関して大道は「やはり当時抜群の知名度を誇っていた〈恐山のイタコ〉という表象を、観光資源の開発に援用したと考えるのが妥当だろう（大道2012：187）」と考察している。

ところが、1977年の『むつ市勢要覧 '77』以降、恐山の項目にイタコは登場していない。

大道の調査によれば『むつ 昭和54年』『むつ1982 市勢要覧』『むつ1986 市勢要覧』『むつ1989 市勢要覧』までイタコが登場していないことが明らかになっている。加えて、大道が調査対象としなかった『むつ市勢要覧1994』『むつ市勢要覧 2000 市制施行40



周年記念誌『むつ市勢要覧 市制施行 50 周年・合併 5 周年』においても、イタコは登場していなかったことが、筆者の調査によって明らかになった。

イタコはマスメディアの影響により相当程度の知名度を得ており、来訪者数の増加に大きく貢献してきた観光資源である。当時はまさに恐山来訪者数は増加の一途を辿っている状況である。こうした状況下においてむつ市がイタコを取り上げなくなったのは何故だったのか。

## 第 2 節：むつ市内における恐山イタコ観光への苦言

むつ市が取り組んだ観光整備、すなわち恐山イタコに焦点を当てる形での観光整備に反発した組織があった。小学校、中学校の現役教員を中心とした、地域教育に従事する 5 名<sup>7</sup>を設立会員として組織された郷土史研究会、組織名は下北史談会である。

下北史談会は 1964 年に設立され、原則的に年に一度の機関誌『うそり』を発行してきた。なお、1972 年に組織名を「下北の歴史と文化を語る会」と変更しているが、本稿の本文中において本会の表記は「下北史談会」に統一し、引用表記においては適宜「下北史談会」と「下北の歴史と文化を語る会」を併用する。

設立後、徐々に会員数を増やしていった下北史談会であるが<sup>8</sup>、本会の会員名簿に記載された当時の住所から、本会員はむつ市に住する人々が大半を占めることが確認できる

(下北史談会 1965a : 38 ; 1965b : 38 ; 1966 : 36 ; 1967 : 67 ; 1968 : 64 ; 1969 : 32 ; 1970 : 46 ; 1971 : 48) (下北の歴史と文化を語る会 1972 : 77 ; 1973 : 64 - 65 ; 1974 : 66 - 67 ; 1975 : 69 ; 2005 : 138 ; 2006 : 260 ; 2007 : 117 ; 2008 : 158 ; 2009 : 231 ; 2010 : 210 ; 2011 : 181 ; 2012 : 140 ; 2013 : 115 ; 2014 : 206)。また、執筆者紹介欄に掲載されている経歴からも、むつ市の地域色が極めて強い研究会であることが確認できる(下北の歴史と文化を語る会 2005 : 136 - 137 ; 2006 : 257 - 259 ; 2007 : 113 - 115 ; 2008 : 154 - 156 ; 2009 : 227 - 229 ; 2010 : 207 - 209 ; 2011 : 178 - 180 ; 2012 : 136 - 139 ; 2013 : 112 - 114 ; 2014 : 202 - 205)。この様に、強い地域色を持つ下北史談会の機関紙『うそり』であるが、執筆者は原則的に会員であり、会員による寄稿を掲載するものとなっている。よって、機関紙『うそり』の編集・発行主体である下北史談会は、地域としてのむつ市と強く結びつくものであると理解できよう。

こうした、むつ市の地域的特色が強い郷土史研究会によって刊行される機関紙『うそり』であるが、読者層にもむつ市民を想定していた。というのも、『うそり』は非売品であり、会員への配布と、希望者へは実費を徴収した上で配布する形をとり、特定の機関にのみ寄贈を行っている。その寄贈先機関とは、「国立国会図書館、青森県立図書館、むつ市立図書館、考古学ジャーナル編集部、名著出版編集部、新人物往来社歴史研究編集部」である(下北の歴史と文化を語る会 1978 : 77)。寄

贈先として、むつ市立図書館が挙げられていることから、下北史談会が本書の読者層にむつ市居住者を想定していると推察できる。

要するに、下北史談会の機関誌『うそり』の特徴を単純化するならば、『うそり』はむつ市に居住する教育従事者による、むつ市に居住する人々に向けた、郷土史研究の発表の場である、と理解できる。

### 第1項：観光状況への批判

さて、下北史談会の機関誌『うそり』第1号の編集後記に本郷土史研究会設立の目的として「下北の歴史を正しくとらえ」ることを挙げている（下北史談会 1965：38）。「正しく理解する」とは、具体的に一体何を指しているのか。『うそり』続号を見てみよう。

第2号の巻頭言<sup>9</sup>には「我々は早急に郷土の先人が数百年（あるいは数千年）かかつて築きあげたこれ等の貴重な遺産を一堂に会して保存するよう呼びかけたい。懐古趣味からではなく、そうすることによつて我々は郷土や先人の営みを正しく認識する窓口が開け、更に現在の時点から深く下北を見つめ、郷土の問題点をえぐり出し、未来像へと関連していくものだからである」とある。そして巻頭言はこう締めくくられる。「我々は、下北に郷土資料館（博物館）を設立することを強く要望する」と（下北史談会 1965：ページ番号無し）。

ここで、下北史談会は郷土を「正しく理解する」ための方策として、郷土資料館（博物館）を設立することを掲げている。すなわち、

郷土資料館（博物館）を通して下北地域に接することが、下北地域を正しく理解することに繋がると下北史談会は主張する。

では、この「正しい理解」の前提となる下北地域に対する「正しくない理解」には何が想定されていたのだろうか。続いて刊行された第3号の巻頭言には以下の苦言が呈されている。「近時ますます観光下北がマスコミにとりあげられてきた今日、それに伴って観光事業も俗化の一途を辿ることは必要悪と思われる。観光下北を宣伝することはよいとして、一体当事者（市町村当局者も含めて）は下北半島のナニを観光資源と考えておるのであるか」「観光下北に博物館一つない現状を為政者、業者は正しい姿と解しておるのであるか」とある（下北史談会 1966：ページ番号無し）。

下北史談会が正しい理解の必要性を主張する前提として、マスコミの影響により発展した観光下北は懸念すべき状況であると説いている。すなわち、外側の社会から受動的に得た下北地域像は「正しくない理解」なのである。

第3号巻頭言はこう続けられる。「下北半島の正しい歴史を解し、下北半島の文化財の保護および活用することこそ観光下北の将来の道でなければなるまい」。そして、「我々は声を大きくして叫びたい。観光下北にとって必要なものは、下北半島の自然美と我々の祖先が残した偉大なる文化遺産を開発し観光資源にせよと……。下北半島の歴史は万を単位とするはるかに古い時代より始まり、

その文化遺産を残した人々のためにも、未来の人々のためにも文化財保護条例は設定されなければなるまい」（下北史談会 1966：ページ番号無し）。

すなわち、下北史談会が苦言を呈したのは観光の現状であった。この困った現状に対する解決策こそが、下北地域を正しい理解に基づいて提示すること、である。

つまり、下北史談会の主張はこうである。マスコミという外側の社会から受動する形での観光下北は、「正しくない理解」に則っている。この現状は解決すべき状況であり、解決の手段として郷土資料館、博物館の設立や条例の制定を行わねばならない、というものである。

ここで重要なことは、下北史談会の主張にはマスコミの影響によって観光化された下北は正しくないものである、ということを前提に置いている。マスコミの影響によって観光化されたものとは、具体的な対象物が明記されていないが、当時の状況から推定して恐山のイタコであった可能性が非常に高い。であるとすれば、下北史談会は恐山で活動するイタコが下北を代表するものであるかのような報道のされ方に順応するむつ市に反発していると理解できよう。

## 第2項：「後進性からの脱却」を目指すという議論

では、下北史談会は郷土資料館や博物館の設立、条例の制定という、下北地域への「正しい理解」を広めることを通して、何を達成

したかったのか。

第2号の巻頭言でこう説明する。「下北も後進性から脱却し、経済・文化を高めようと望むならば、最低限この程度の施設があつて然るべきであろう」（下北史談会 1965b：ページ番号無し）。「この程度の施設」とは、郷土資料館を指す。

つまり、正しい理解に基づいた下北地域像を提示することは、下北地域が後進性からの脱却を成し遂げるにあたり重要である、と下北史談会は主張しているのである。本会の後進性への関心の強さはその後も繰り返し確認できる。

下北史談会は座談会「下北の歴史を語る夕べ」を1966年夏に主催した。機関誌『うそり』第4号に座談会の内容報告を兼ねた論考が発表されている。本稿の著者は、中学校の教諭として地域社会における教育に携わりながら、下北史談会の副会長として長年にわたり活動の中心的役割を果たし、後には会長として下北の歴史と文化を語る会の解散にまで立ち会い尽力した人物、前田哲男である。前田に拠れば、この座談会での報告内容は「共通して、下北半島の歴史を研究していくと、立派な文化の営みがみられ、私たち下北の住民にとつて誇りに足るものであり、決して後進地域としての下北ばかりを見てはならないことを強調していた」（前田 1967：61）。

前田による報告によれば、座談会は下北地域の文化的営みの歴史を強調するものであった。こうした文化的歴史の存在を確認することは、下北を誇ることを可能とするものであ

った、と座談会の意義を前田は記している。であることから、この議論の前提として、下北地域は後進地域である、という論理で下北地域を捉えることが一般理解であったことが推察できる。

そして前田はこう提案する。「劣等意識のみに左右されずに素直な立場から、下北の先人の歩みをふりかえり発展してきた下北の文化、歴史を正しく認識し、その上に立つて私たちは、今日の下北を更に発展させていくように努力すべきでは、ないでしょうか」（前田1967：61）。

むつ市という地域性に強く特徴づけられた下北史談会の中心的人物である前田が、むつ市民を主な読者として想定する機関紙『うそり』において記した本論考こそが、当時の下北地域に住まう人々が、下北地域をどのように捉えていたかを如実に示したものと理解してよいだろう。であるならば、下北地域を後進地域として捉え、この点において劣等感を抱いていたことは稀有な見解ではなく、相当程度に説得力を持って受け入れられていた見解であったと理解できよう<sup>10</sup>。

以上から、下北史談会の主張はこのように整理できる。下北史談会は、後進地域ゆえの劣等意識を拭い去るために、文化的営みの豊富な歴史の存在を理解しよう、と呼びかけている。その方策として提案したのが、郷土資料館や博物館の設立である。もっとも、下北史談会は郷土史研究会であることから、歴史の重要性を捉えることに重きを置くことへの偏りがあることは否めないであろう。である

ならば、重要なのは、後進地域ゆえの劣等意識を拭い去る方策としての歴史への理解ではなく、当時の下北地域において、後進地域ゆえの劣等意識が存在していたことそれ自体である。

すでに確認してきた通り、この主張の意義を説明する際に、提示されたものこそ、観光下北の現状であった。すなわち、下北史談会の主張は、観光下北の問題ある状況を解決するための方策としての意味を持つ。であると同時に、観光下北の現状は、後進地域ゆえの劣等感を拭い去るのに寄与しない、と下北史談会は理解していることになる。マスコミの影響によって発展した観光下北、つまり恐山イタコ観光では、後進性から脱却を図る際の助けとならない、のである。

### 第3項：前近的な存在としてのイタコ

このように、下北史談会が是とするのは郷土の歴史性であり、反対に、本会はイタコ観光には批判的であった。下北史談会はイタコをどのように捉えていたのだろうか<sup>11</sup>。

機関誌『うそり』において恐山に関する論考が初めて掲載されるのは1974年に刊行された第11号のことであった。論考の著者は大山順道である。当時、大山は下北半島の南西部に位置する脇野沢村の教育長であり、本会の非会員であった。もっとも、原則としては本誌への寄稿者は会員に限定されているが、下北史談会の設立十周年を記念し、非会員の論考を掲載したものである（下北の歴史と文化を語る会1974：64）。

大山が寄稿した論考のタイトルは「日本的  
仏国土恐山」である。恐山が日本的であるこ  
との鍵となっているものとして、大山は巫女  
の存在を取り上げる。

「古文書によると、巫女はその昔、置かれ  
た地位も素性も大変なものであったらしい。  
日本媛命は雄略帝の皇女であり、有智子内親  
王は嵯峨帝の皇女で、ともに巫女として国の  
大事を口寄せしたことが記せられてる。この  
ことから察するに、神託、神勅なるものは、  
実はここに起因した時代が想定される。国是  
の起因を巫女の口寄せに求め得るとすれば  
ある限られた時代にせよ 大和民族とチャー  
マンの関係は不離なものになってくる」と記  
されている（大山 1974：2-3）。

つまり、ここで巫女は前近代的な存在とし  
て位置づけられている。現代のイタコが在野  
の巫女であることを鑑みれば、イタコは前近  
代的なものに分類して理解されていたことにな  
る。ここで重要なことは、機関誌『うそり』  
において、第 11 号にして初めて恐山を題材  
とした論考の内容は、巫女が前近代的な存在  
であることを強調するものであったことであ  
る。

そして大山は当時の恐山イタコ観光への苦  
言を続けている。「恐山祭典に群集する巫女  
の口寄せに、日本国中の者は何故大騒ぎする  
のであろうか（大山 1974：3）」。

大山は恐山祭典に群集する巫女、すなわち  
恐山イタコ観光への批判を示し、筆を置いて  
いる。

### 第 3 節：小括

第 2 章と第 3 章において、むつ市の動向と  
下北地域における下北地域像について確認し  
てきた。以下のようにまとめられる。

むつ市を含む下北地域において、立ち遅れ  
た辺境の地として自らを位置づけることが繰  
り返され、1960 年代にはそうした後進性か  
らの脱却を目指すことが繰り返し議論されて  
いた。実際に地域開発への取り組みに着手す  
るも、頓挫に終わってしまう。

そうした状況において、むつ市に位置する  
恐山が俄かに脚光を浴びることになった。恐  
山で活動するイタコと呼ばれる在野の巫女の  
存在がマスメディアの関心を引きよせたので  
あった。その結果、恐山には数多の観光客が  
押し寄せるようになった。1963 年以降、む  
つ市はイタコを恐山観光の中心のように提示  
するが、それは 1975 年を最後として継続し  
なかった。

なぜ、むつ市はイタコ観光を恐山観光の中  
心的役割に位置付けなかったのか。郷土資料  
から明らかになったのは、むつ市内において  
イタコは前近代的なものとして位置づけられ  
ていたことである。

ここで重要なことは、「後進性からの脱却」  
を指針とする文脈において、「前近代的な」  
イタコ観光は否定的な意味を帯びることであ  
る。すなわち、当時のむつ市地域において恐  
山イタコ観光とは、「立ち遅れた辺境の地」  
という地域像が抱える問題解決に寄与しない  
ものとして位置づけられていたのである。



## 第4章 おわりに

### 第1節：発見と意義

以上より明らかになったことは、むつ市が観光客の増加に貢献する観光資源を継続して活用しなかったのは、地域住民間で繰り返し確認されていた、地域像が抱えた問題の解決策に寄与しないものであったからである。すなわち、むつ市が組織として発信する前段として、その当時の地域住民が抱いていた地域像は、非常に重要であったと言えるだろう。

本稿が事例としたむつ市のように、観光資源を抱えていてもなお観光客誘致を図らない状況とは、おそらく今日の社会においても少なからず散見されることは想像に難くない。一般に、観光政策を観光拡大化策として検討する傾向があるなか、地方自治体が観光縮小化策を取り得る状況を捉えた点に、本稿の意義が認められよう。

地域像を手掛かりとして地方自治体の政策形成へ接近する試みについては既に宮崎(2019)が1990年前後を中心とした水俣市を事例として報告している。であるならば、本稿の発見は、1970年代を中心としたむつ市という、特定の年代の特定の地方自治体だけに観察されるものではないことが分かる。すなわち、当時のむつ市のように、地方自治体内で理想とされた地域像あるいは否定された地域像の重要性はある程度一般性を持つものとして提起できるのではないだろうか。

### 第2節：今後の課題

本稿が取り上げた事象は、むつ市地域において否定された地域像を読み解くものであった。であるならば、対照的に、理想とされた地域像とそれに接近する方策は何だったのか。

当時のむつ市を概観する上で看過できないのは、原子力事業である。むつ市の原子力事業は、原子力船の母港事業に始まる。原子力船の母港事業とは、1967年に日本初となる原子力船の母港としてむつ市の大湊港が内定したものである。この原子力船は放射能漏れの事故を起こしながらも、現在でもなお原子力船母港の後続事業がむつ市において継続されている。

むつ市内において、原子力船の母港事業はどのような地域像と結びついていたのか。今後の課題として、残したい。

### 付記

本稿は、日本行政学会2018年度研究会においてポスターセッション「行政研究のフロンティア」にて報告したものの一部をまとめたものである。

### 参考文献

- 上田誠(2016)「観光政策における政策アクターの多様性と相互関係」真山達志編著『政策実施の理論と実像』ミネルヴァ書房、219-239頁。  
 大道晴香(2012)「恐山菩提寺を「イタコ寺」にしたのは誰か：マス・メディアの「共犯者」としての地方自治体」『蓮花寺佛教研究所紀要』第5号、206-180頁。  
 大道晴香(2017)『「イタコ」の誕生：マスメディアと宗教文化』弘文堂。  
 大山順道(1974)「日本的仏国土恐山」下北の歴史

と文化を語る会編『うそり』第11巻、1-4頁。  
 柿崎素弘(1967)「序」下北社会科教育研究会編『下北の郷土資料』、ページ番号無し。  
 神奈川県自治総合研究センター編(2007)『自治体学研究』第94号、神奈川県自治総合研究センター・研究部。  
 工藤秀明(1967)「下北の地域性」下北社会科教育研究会編『下北の郷土資料』、1-4頁。  
 下北史談会編(1965-1971)『うそり』第1巻-第8巻、下北史談会。  
 下北社会科教育研究会編(1967)『下北の郷土資料』。  
 下北社会科教育研究会編(1980)『わたしたちの下北 昭和55年度版』。  
 下北社会科教育研究会編(1981)『わたしたちの下北』。  
 下北社会科教育研究会編(1984)『わたしたちの下北 昭和59年改訂版』。  
 下北社会科教育研究会編(1991)『わたしたちの下北 平成3年全面改定版』。  
 下北社会科教育研究会編(1993)『わたしたちの下北 平成5年部分改訂版』。  
 下北社会科教育研究会編(1998)『わたしたちの下北 平成10年全面改定版』。  
 下北の歴史と文化を語る会編(1972-2014)『うそり』第9巻-第50巻、下北の歴史と文化を語る会。  
 申賀謙太郎(1967)「まえがき」下北社会科教育研究会編『下北の郷土資料』、ページ番号無し。  
 高松敬吉(1993)『巫俗と他界観の民俗学的研究』法政大学出版局。  
 鳴海健太郎(1967)『下北半島主要文献目録』下北史談会。  
 蓮見音彦・似田貝香門・矢澤澄子(1990)『都市政策と地域形成：神戸市を対象に』東京大学出版会。  
 前田哲男(1967)「下北の歴史を語る夕べ」下北半島市の問題点』下北史談会編『うそり』第4号、58-63頁。  
 水上勉(2005a)『飢餓海峡』河出書房新社、改訂決定版(初版は1963年、朝日新聞社)、上巻。  
 水上勉(2005b)『飢餓海峡』河出書房新社、改訂決定版(初版は1963年、朝日新聞社)、下巻。  
 宮崎友里(2019)「地方自治体の観光政策と社会心理学の視点」日本グループ・ダイナミックス学会『実験社会心理学研究』第58巻第2号、147-160頁。  
 むつ市(1964)『むつ市政だより：昭和39年12月』第3号。  
 むつ市(1965)『むつ市政だより：昭和40年6月』第6号。  
 むつ市(1965)『むつ市政だより：昭和40年11月』第8号。  
 むつ市(1966)『むつ市政だより：昭和41年4月』第10号。  
 (編著者名記載無しだがむつ市と推察される)

(1960)『むつ市勢要覧 1960 市制施行一周年記念』むつ市。  
 むつ市役所企画室編(1963)『むつ市勢要覧 1963年版』むつ市役所。  
 むつ市役所企画課編(1966)『むつ 1965』むつ市役所。  
 むつ市役所企画課編(1968)『むつ市勢要覧 1967年版』むつ市役所。  
 むつ市調査課編(1971)『むつ市勢概要 1971年版』むつ市調査課。  
 むつ市調査課編(1972)『むつ市勢要覧 1972』むつ市役所。  
 むつ市企画調整部編(1975)『むつ市勢概要 1975年版』むつ市企画調整部。  
 むつ市企画調整部編(1977)『むつ市勢要覧 1977年版』むつ市企画調整部。  
 むつ市商工観光課統計係編(1979)『むつ 昭和54年版 市政施行20周年記念市勢要覧』むつ市。  
 むつ市商工観光課・統計係編(1982)『むつ市勢要覧 1982』むつ市。  
 (編著者名記載無しだがむつ市と推察される)  
 (1986)『むつ市勢要覧 1986』むつ市。  
 むつ市経済部商工観光課編(1989)『むつ市勢要覧 1989 市制施行30周年記念要項』むつ市。  
 むつ市企画部企画課編(1994)『むつ市勢要覧 1994』むつ市。(資料編『データむつ』を含む)  
 (編著者名記載無しだがむつ市と推察される)『むつ市勢要覧1999資料編 データむつ』むつ市企画部企画課。  
 むつ市企画部企画課統計係編(2000)『むつ市勢要覧 2000 市制施行40周年記念誌』むつ市。  
 むつ市企画部企画課編(2009)『むつ市勢要覧 市制施行50周年・合併5周年』むつ市。  
 Wicke, C., Berger, S., & Golombek, J. (2018). *Industrial Heritage and Regional Identities*. Abingdon: Routledge.

## 新聞資料

朝日新聞(聞蔵Ⅱビジュアル)  
 東奥日報(国立国会図書館所蔵)

## 注

- 1 筆者はむつ市立図書館所蔵の鳴海(1967)『下北半島主要文献目録』を用いて、下北半島に関する東奥日報の記事のタイトルと日付について確認した。この作業に基づいて、国立国会図書館所蔵の東奥日報の複写を入手する形で、当時の東奥日報の記事を閲覧した。
- 2 東奥日報1959年1月1日「下北①」参照。
- 3 東奥日報1959年1月7日「下北⑥」参照。
- 4 1975年を現在とする資料において、「数年前から、地元のバス会社が経営する恐山のレストハウスで、観光客のために口寄せをしている」

- とある（高松1993：46）。このため、レストハウスでのイタコの口寄せは1970年頃から開始されたと推定した。
- 5 名称は発行年によって若干異なっている。
  - 6 民俗学者の佐治靖とシャーマニズム研究の代表的論者である桜井徳太郎の両者が共通して、イタコの認知度を上げるにあたり水上勉著『飢餓海峡』が貢献したと指摘したと、大道は紹介する（大道2012：187）。『飢餓海峡』は、1962年1月から同年12月まで『週刊朝日』に連載された小説である。本連載終了後の1963年に、その後の展開を書き足したものが朝日新聞社から刊行された。その後、本作品は映画化され、1965年度の日本映画記者会の映画賞を受賞している。監督賞、主演女優賞、主演男優賞、助演男優賞を映画『飢餓海峡』が独占し、本作品がいかに注目を集めたものであったかをうかがい知ることが出来る。小説それ自体もロングセラーとなり、多作で知られる水上勉の代表作と評される作品である（水上勉2005b：373-375）。
  - 7 『うそり』第1号刊行当時の会員の所属の内訳は中学校3名、小学校1名、下北教育事務所1名である（下北史談会1965a：38）。なお、第1号刊行当時に下北教育事務所所属であった橘善光も、1964年3月末までは高等学校に所属していた。橘が1964年4月に下北教育事務所に所属となった後、下北教育事務所内の一室にて集ったことを契機として、下北史談会の結成に至った（下北の歴史と文化を語る会1974：64）。
  - 8 例えば、下北史談会が下北の歴史と文化を語る会へと名称を変更した1972年には会員は24名になり、機関紙『うそり』最終号を刊行した2014年には会員数は34名であった（下北の歴史と文化を語る会1972：77；2014：206）。
  - 9 第1巻から第3巻までは、巻頭言が掲載されている。なお、第1巻の巻頭言には、下北史談会の結成と機関誌『うそり』の意義について記されている。
  - 10 他にも、下北史談会立ち上げメンバーの一人、鳴海健太郎も類似の意見を述べている（鳴海1968：61）。なお、前田と鳴海はむつ市に住所があることから、彼らの指摘は当時の下北居住者の一般的見解であったと理解して良いだろう（下北史談会1968：64）。
  - 11 全50巻にわたる機関誌『うそり』にして唯一の別冊が2007年に刊行されているのだが、本別冊の特集こそ、イタコであった。一冊分をイタコ研究を牽引してきた高松敬吉ひとりが執筆したもので、タイトルは「民間巫女の系譜：特に青森県下北郡のイタコの動態について」である。但し、出版年が本稿の分析対象時期とかなり異なっているため、ここでは詳細に触れない（下北の歴史と文化を語る会2007b）。

なお、会員名簿において高松の名前を確認で

きるのは、1978年が最初である。下北史談会の設立メンバーではないが、入会以降16もの論考と特集を機関紙『うそり』において発表するなどして活発に活動しており、中心的メンバーであったと推察される。

また、下北史談会は郷土愛好家を多く会員として擁していたが、高松は民俗学を専門とする研究者である。高松個人の活動としては、博士論文でもある著書『巫俗と他界観の民俗学的研究』（1993年）をもって、柳田国男賞（第三十二回）を受賞している。

# Mutsu City and Itako Tourism in Osorezan: Focusing on Regional Image There

MIYAZAKI Yuri \*

## Abstract

This article aims to present that local government does not always take an active approach to tourism expansion, with a focus on Mutsu city. In Japan, many local governments have adopted certain tourism policies, which are intended to be understood as tourist expansion measurements. But, in reality, there were local governments that did not attempt to actively attract tourists using available resources.

Since the 1960s, Osorezan in Mutsu city has become famous among some Japanese for its spiritual mediums who are called 'Itako'. Itako led many tourists to visit to Osorezan and yet Mutsu city does not continue to actively use these Itako. The aim of this case study is to answer why Itako are not officially used as a tourism attraction. To begin with, chapter2 will explain the importance of regional images shared among local residents. That is the image of the "backward areas". Among these local residents, the importance of development is shared. Afterward, chapter3 will focus on the image of mediums among local residents: Pre-modern. This case study concludes that Itako in Mutsu city cannot solve the problem of the regional image, and thus are not actively promoted in tourism.

This case study demonstrates the importance of regional images shared in cities and their surrounding areas. This article proposes that the regional images are helpful for understanding the local government's behavior.

---

\* Ph. D. student in Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.